朝日新聞　2018年7月30日（月）

100回の節目 快進撃数々

87チーム 南大阪の軌跡

87チームが参加した南大阪大会は近大付が制し、100年ぶりの夏の甲子園出場を決めた。一昨年、昨年と初戦敗退した雪辱を果たした。

際だっていたのは守備の堅さだ。投手陣は最速144キロの直球が武器のエース左腕大石が先発5試合で6失点36奪三振と安定感抜群。残り2試合はいずれも2年生の梅元と前岡が継投で試合を作った。準決勝、決勝に向けて大石を休ませることができたのは大きかった。全7試合で失策はわずかに2。遊撃手の道正を中心に守備から試合の流れをつかんだ。

打線の軸になったのは主将花田だ。2番でフル出場し、25打数13安打と攻撃の起点となった。優勝から一夜明け、花田は「目の前の一勝を全員でもぎ取るという姿勢が、今までにないほどあった」と振り返った。

準優勝の大商大堺は2005年以来の決勝進出。準決勝までのチーム打率は3割7分6厘。大会で急成長を遂げた2年の古川が起爆剤となり、準々決勝は強打の初芝立命館に打ち勝ち、準決勝では上宮太子に競り勝った。決勝でも近大付を2本上回る8安打を放ち、あと一歩まで迫った。

第100回の節目の大会として、伝統校の活躍にも注目が集まった。

全国選手権大会に過去13回出場し、39年ぶりの出場を目指した古豪・大体大浪商は圧倒的な打力で3回戦までの3試合を計56得点でいずれもコールド勝ち。本格派右腕・立石を擁し、準決勝で近大付とのエース対決に挑んだが、ここ一番で打線が振るわなかった。試合後、主将の辻中は「取り切らないといけないところを取り切れなかった。負けるべくして負けた」と悔しがった。

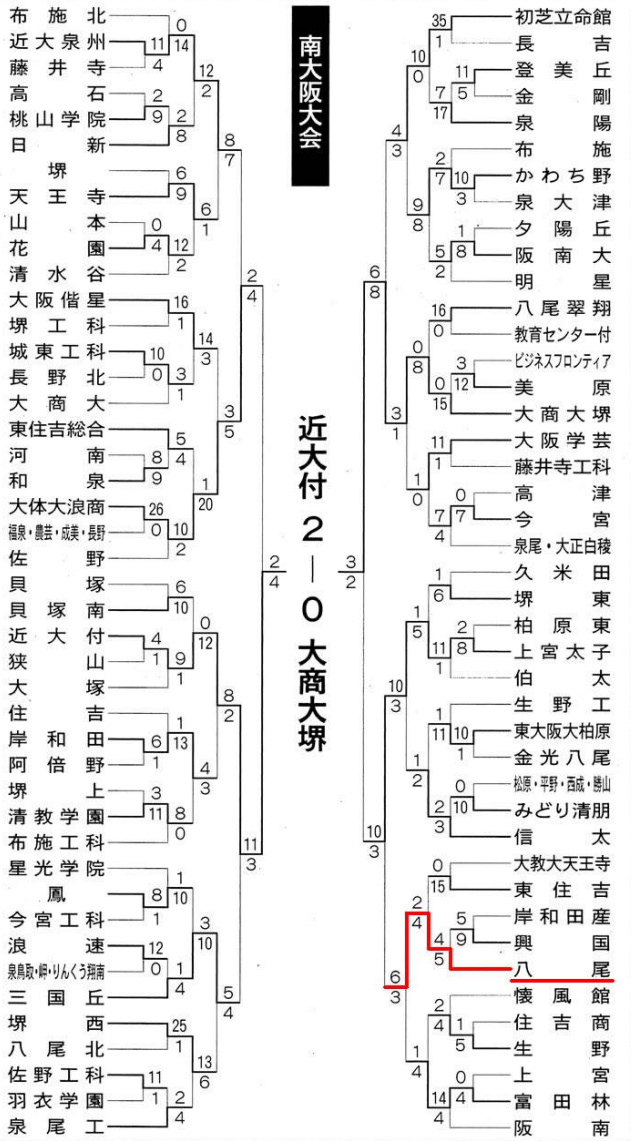
第50回記念大会で全国制覇を果たした興国。春の近畿大会府予選で、昨年の選抜大会準優勝の履正社に完封勝ちし、オールドファンの期待が高まったが、2回戦で敗退した。

歴史ある公立校の躍進も印象的だった。1901年創部の三国丘は2年生エース上坂を軸に、同じ堺の公立勢の鳳、堺西を次々に破る快進撃を見せた。「全国中等学校優勝野球大会」に八尾中として2度出場したことがある八尾は、初戦で興国を破って勢いに乗り、4回戦の富田林戦では逆転勝ち。準々決勝で上宮太子に敗れたが、8強入りを果たした。

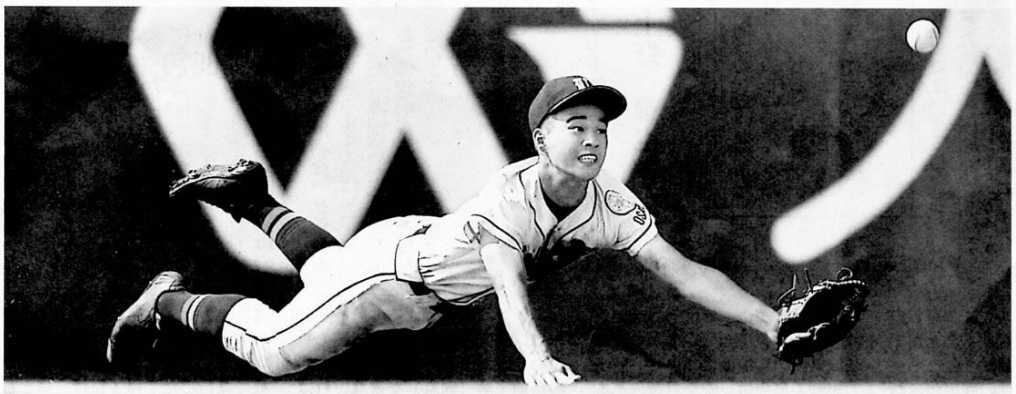
（坂東慎一郎）

南大阪大会

近大付 2 — 0 大商大堺



※ 同窓会事務局補足
八尾高校として「全国高等学校野球選手権大会」には2度出場。
昭和27(1952)年・第34回大会では準優勝、
昭和34(1959)年・第41回大会ではベスト4の成績を残している。



八尾―上宮太子　二回表八尾2死、左翼手竹田は藤井の飛球を追うが捕れず、安打となる＝シティ信金スタ、金居達朗撮影